

# Tamburlaine の 性 格 と 思 想

阿 久 津 二 郎

## The Character and Ideas of Tamburlaine

Jiro AKUTSU

### Abstract

Tamburlaine, a shepherd in Scythia became a powerful king by a succession of conquests. His appearance was majestic and impressive. He had superhuman qualities. His unbounded ambition was an essential part of his ideas. But he was ruthlessly cruel in battles. Marlowe created the stately blank verse, the mighty line, as the mode of expression of these subjects.

### 1 その風貌について

Tamburlaine の性格と思想を考える前にその風貌について見よう。第1部の始めにおいて Persia 王 Mycetes の弟 Cosroe の臣 Menaphon は彼の風貌を次のように言っている。

Of stature tall, and straightly fashioned,  
Like his desire, lift upwards and divine,  
So large of lims, his joints so strongly knit,  
Such breadth of shoulders as might mainly beare.  
Olde *allas* burthen. (II. i. 7-11.) 1)

身長は高く、真直な形で、  
彼の望みのように高く掲げられて神々しい。  
手足はすばらしく大きく、関節はしっかりと結ばれており、  
かの古のアトラスの荷を担えるような広い肩幅である。

Pale of complexion: wrought in him with  
passion,  
Thirsting with sovereignty, with love of armes:  
.....  
In every part proportioned like the man,  
Should make the world subdued to *Tamburlaine*. (II. i. 19-30)

顔色は青白く、内には情熱が燃え、支配欲と武力愛に  
渴えている。

昭和51年10月22日受理

.....

あらゆる部分で、世界をタムバレインに屈服せしめる  
人のように釣合がとれている。

かくてこの言葉は Cosroe の心を動かして、兄王に叛  
いて Tamburlaine に味方させたのである。また Mycetes  
の部将 Theridamus が始めて Tamburlaine に会ったと  
き、その有様を述べて（観客に向かって言う）。

A Scythian shepheard so imbellished  
With Natures pride, and richest furniture?  
His looks do menace heaven and dare the  
Gods,  
His fierie eies are fixt upon the earth,  
As if he now devis'd some Stratageme:  
Or meant to pierce *Avernus* darksome vaults,  
And pull the triple headed dog from hell.  
(I. ii. 155-61)

天性の誇りと最も豊かな武器をもって飾られたシシヤ  
の羊飼か。

彼の容姿はまことに天をおびやかす神々を相手に立向  
う。

彼の火のごとき眼は地上に注がれる。

あたかも今彼がある戦術を工夫し、地獄の暗い丸天井  
を貫いて、

三つの頭をもつ犬を地獄から引き出すつもりであるか  
のように。

このように Tamburlaine は堂々たる風貌をもち、それ  
は彼の内なる気概のあらわれであった。Theridamus は

彼に勧められて遂に

Won with thy words, and conquered with  
thy looks,  
I yecld my selfe, my men and horse to thee:  
(I. ii. 228, 9)

貴下の言葉に打負かされ、貴下の風貌に征服されて、  
私は私自身と私の部下と馬を貴下に捧げます。

と述べて、臣下の誓をするに至った。これはいずれもこの劇で重要な事件であり、かつ両方とも hero の風貌が主要な動機となっていることに注目したい。

## 2. その実力主義について

Marlowe と Machiavellism については従来種々論ぜられているが、英訳により Marlowe は間接的に Machiavellism を知った<sup>2)</sup> ので、こゝでは之を避けて単に実力主義として論を進める。

第1部の前書にあるごとく Tamburlaine はシシヤの羊飼で、これがたぐい稀なる驚異的な征服によって強力な王者となったのである。羊飼であるから彼はこの劇で最初は羊飼の服を着て (in a shepherd's robe) — おそらくぼろ服であろう — 舞台に登場する。この時は Zenocrate を連れて来るのであるが、

I am a lord, . . .  
And yet a shepherd by my Parentage: (I.  
ii. 33-5)

私は王であり……

しかも生れは羊飼である。

と自分で Zenocrate に言っている。その後ト書によれば、羊飼の服を脱ぎ、剣を帯びた甲冑の姿であられ、この鎧と剣こそ吾にふさわしいものと壮語するのである。Tamburlaine の敵は彼を thievish villain (盗人の悪漢), the villain (悪漢), the shepherd's issue (羊飼の生れ), baseborn Tamburlaine (卑しい生れのタムバレイン) と呼ぶ。卑賤の生れの者が実力によって王となることは、この二部作を通じての一つの基調をなしている。

Mycetes が生れながらの王でありながら、それを維持する平凡な王にもなれず、暗愚で自信なく、あっ気なく弟に滅ばされる一件を劇の最初に出していることは、Tamburlaine が征服に征服を重ねて王者となるのとよい

対照をなしている。Tamburlaine の強大を示すために、始めに弱い王を配置したのであって、こゝにも Marlowe の作劇の才能が見られるのではなからうか。

以上のごとく私は Tamburlaine の実力主義について述べたが、更につつこんでこの実力主義の基礎となっているものを追及しよう。

## 3 その中心思想について——実力主義の基 本となるもの

Tamburlaine が Cosroe を攻めたとき、傷ついた Cosroe の言に対していう Tamburlaine の次の言葉は彼の中心思想を示すものである。

The thirst of raigne and sweetnes of a crown,  
That causde the eldest sonne of heavenly Ops,  
To thrust his doting father from his chaire,  
And place himselfe in the Emperiall heaven,  
Moov'd me to manage armes against thy state.  
What better president than mightie Jove?  
Nature that fram'd us of foure Elements,  
Warring within our breasts for regiment,  
Doth teach us all to have aspyring minds:  
Our soules, whose faculties can comprehend  
The wondrous Architecture of the world:  
And measure every wandring plannets course:  
Still climing after knowledge infinite,  
And alwaies mooving as the restles Spheares,  
Wils us to weare our selves, and never rest,  
Untill we reach the ripest fruit of all,  
That perfect blisse and sole felicitie—  
The sweet fruition of an earthly crowne. (II.  
vii. 12-29)

統治への渴望と王冠の快さが

天のオプスの長男をして愛におぼれる父親を王座から  
押しのけ、

自らを天の帝王の座につかしたのだが、

それが私をも動かしてお前の国に対して武器を取らせ  
た。

強大なジョブよりもよい先例があろうか。

自然は四つの元素でわれらを創り、

それらは統制を求めてわれらの胸中で戦い、

われらすべてに高く憧れる心を持てと教える。

われらの魂はその能力で世界の驚嘆すべき機構を理解  
し、

あらゆる遊星の運行を測定できるのだが、  
無限の知識を求めてなおかけ登り、  
休むことのない天球のように常に運動しており、  
自らを疲れさせそして決して休むなとわれらに望むの  
だ。

すべてのものゝ中でもっとも熟れた果実、  
あの完全な無上の喜びと唯一の至福——  
地上の王冠という甘美な果実を手に入れるまでは。

以上の詩にあらわれているものは Tamburlaine の中心思想であり、彼の性格がはっきり読みとれる部分である。「高く憧れる心」によって統治への無限の渴望を充たし、王冠獲得の快感を味わうとして彼はひたすら実力による征服の道を進むのである。そしてその憧れる心は Nature がわれわれに教えるのである。(作品そのものだけによって、その著者の思想を推論することは、ある場合には危険なこともあるが、ここでは Tamburlaine の思想をもって Marlowe の理想と解釈してはゞ間違いないと思われる。)

#### (1) 王冠の象徴するものと劇の手法

高く憧れる心をもって王冠獲得のよろこびを味わうとする。王冠はその高く憧れる心の象徴であり、目標であるが、同時に Marlowe はこの王冠をもって地上権力の象徴として劇にとり入れているものと思う。すなわち彼は戦争劇を作るに当って舞台の上での戦闘で、勝者が敗者を打負かすという活劇の、多くの俳優とエネルギーを必要とし、又単調となるのを避けて、王冠の授受をもって権力の移動、勝敗を示すという劇の手法を用いている。これはまさに賢明な方法であり、王冠の持つ視覚的な輝かしさが彼の調べ高い詩や、時折ひびくトランペットの聴覚的美しさと相俟って、観客に訴えるのは実際の活劇よりも効果が大きかったと思われる。なお王冠の授受の仕方に種々の変化が可能である。劇中至るところに王冠の授受があるが、その大きなものは、第1部2幕7場で、前述の中心思想が述べられた後 He takes the Crowne and puts it on, 「彼がその王冠をとりこれをかぶる」と示されたように、Tamburlaine がペルシヤ王となる場面と、Zenocrate に Zabina の王冠をとって与える場面(3幕3場)であろう。なお王冠は、一部笑劇的にも使われている。附言すれば Marlowe は王冠の外に敵王を檻より出してこれを踏台にして王座に登ることと、敵王に曳かせた戦車に乗って舞台にあらわれるという独創の手法を案出し、これによって観客を大いに湧かせたのである。これは又彼の喜劇を作る才能のあらわれと見なすことが出来よう。

#### (2) Nature について

高く憧れる心は Nature が我々に教えるとするが、この場合の Nature、四元素については Empedocles の説いたところであるからそれを調べよう。

Empedocles はオルフィス神秘主義の信者であると同時に科学的な思想家である。究局的に不変の四元素、四つの基本的神性があり、それによって世界のあらゆる構成物が造られていると彼は考えた。すなわち火・空気・水・土の四つである。これら万物の四つの根源は永久に統合され、そして二つの活動的な形而下の力、愛と斗争——人間の中に活動しているが、真に全世界に行きわたっている力によって永久に分離される。新しい物は生れず又生れることが出来ない。起り得る変化はだゞ元素と元素の並列における変化だけである<sup>3)</sup>。

Marlowe はこの Empedocles の考え方をとり入れたのではなからうか。しかし彼は Strife (斗争) を Love (愛) よりも強調し、これを主眼としているように見える。この四つの元素が斗って高く憧れる心をいだかせるというのである。

#### (3) 中心思想の表現方法

この統治への渴望、無限への憧れを Marlowe はその詩才をもって調べ高い無韻詩で綴ったのであるが、無限を表現するに当って、第一に時間的にはギリシア・ローマの神話を借りて古の世界へわれらを導入し、第二に空間的にはその修得した天文学の知識と地理的に征服した又は将来征服しようとする地名を行間にちりばめるという手法を用いている。これは彼の Cambridge 大学で学んだ学問特に古典の教養や天文学者との交遊が大いに役立っており、いわゆる University Wits の特長が顕著にあらわれているところである。神話を引用するに当って、勝利を謳歌する場合(上例ローマ神話 Ops)と敗者または敗者からの呪いを表わす場合とあるが、後の場合には地獄(ギリシヤ神話 Hades)に関するものが度々使われている。

例えば大砲を、冥界の入口のように開口しているといっている。

Then shall our footmen lie within the trench,  
And with their Cannons mouth'd like *Orcus*  
gulfe.

Batter the walles, and we will enter in:  
(III. i. 64-6)

然る後にわが歩兵を塹壕の中に臥せさせ、  
冥界の入口のように大砲を以て、  
城壁に打込んでその中に攻め入ろう。  
又 Tamburlaine を呪って Bajazeth の言う言葉、

Furies from the blacke Cocitus lake,  
Breake up the earth, and with their firelands,  
Enforce thee run up on the baneful pikes.  
(V. i. 218-20)

黒い地獄の湖から怨霊よ  
地面を割って出て彼らの松明で  
お前を有毒な穂先の上で走らせよ。  
天文学の引用の例としては

Smile Stars that reign'd at my nativity,  
And dim the brightnesse of their neighbor  
Lamps:  
Disdaine to borrow light of *Cynthia*,  
For I the chiefest Lamp of all the earth, (IV.  
ii. 33-6)

わしの生れを支配する星よ、微笑せよ。  
そして隣の星の輝きを暗くせよ。  
月の光を借りることをいさぎよしとせざれ。  
何故ならわしは地球全体のもっとも主なる光であるから  
らだ。  
このように天文学の知識の利用が、その他全篇にしばしば  
見られる。  
地名については劇中至るところに見られるが、その一  
例をあげれば、Persia, Persopolis, Mexico, Jubalter 等  
である。

Untill the Persean Fleete and men of war,  
Sailing along the Orientall sea,  
Have fetcht about the Indian continent:  
Even from *Persepolis* to *Mexico*,  
And thence unto the straightes of *Jubalter*:  
(III. iii. 252-6)

ペルシヤの艦隊と戦士達が  
東洋の海を航海して、  
印度大陸を席捲し、  
ペルセポリスからメキシコまで、  
そしてそこからジブラルタル海峡まで  
又第2部で Tamburlaine が地図を持って来させて、自

己の征服を語り、未征服の国を示す場面では特に鮮やかにその効果を挙げている。

Here I began to march towards *Persea*,  
Along *Armenia* and the Caspian sea,  
And thence unto *Bythinia*, where I tooke  
The Turke and his great Emprise prisoners,  
Then marcht I into *Egypt* and *Arabia*,  
And here not far from *Alexandria*,  
Whereas the Terren and the red sea meet,  
Being distant lesse than ful a hundred leagues,  
I meant to cut a channell to them both,  
That men might quickly saile to *India*.  
(Part 2. V. iii. 126-35)

ここでわしはアルメニアとカスピ海に沿ってペルシヤ  
に向って進軍を開始し、  
そしてそこからビシニアに赴き、  
そこでトルコ人とその偉大な女王を捕虜にした。  
その後エジプトとアラビヤに侵入した。  
ここはアレクサンドリヤから遠くなくて  
地中海と紅海の合うところで、  
全長100リーグも離れていないから、  
人々が印度へ早く航海できるように、  
二つの海に通ずる運河を開きくするつもりだった。  
当時早くもスエズ運河開きを計画するという雄大さ  
は、異国趣味への憧れと相まって観客に大きな感銘を与  
えたと思われる。なおわれわれはこの地名の発音が美しく  
響くことに特に注意しなければならない。

#### 4. その超人性について

Tamburlaine の実力主義に加えて、Marlowe は更に  
彼に超人性を与えている。卑賤の生れの者が実力により  
征服を重ね、しかも常勝を続けるのであるのから、そこ  
で超人性が出て来るのは自然の成行である。ここで超人  
性を二つの意味に区別して考えよう。

第一は Marlowe のいわゆる Scourge of God (神の  
鞭) の意味であり、第二は王者が神に近いという意味で  
ある。

Scourge of God は  
I that am team'd the Scourge and Wrath of  
God,  
The only feare and terrour of the world,  
(III. iii. 44-5)

神の鞭と怒りと名づけられ、  
世界の唯一の不安と恐怖であるわれ

と自ら述べているが、Scourge of God とは元来 Attila に与えられた名である。Attila はフン族の王で、445-50 年間に東ローマ帝国を掠奪し、453 年に死んだ。すなわち Marlowe は古くヨーロッパに侵入せるフン族の王につけられた仇名を Tamburlaine に与えた。この名を与えることによって彼の強大さを一層強く印象づけようとしたのではなかろうか。

第二の意味における超人性は第1部第2幕5場で、Usumcasane の言葉、To be a King, is halfe to be a god (56)「王となることは半ば神になることだ」がある。これは Persepolis へ凱旋しようという Tamburlaine に答えて言われたのである。更に Theridamus は

A god is not so glorious as a King,  
I thinke the pleasure they enjoy in heaven  
Can not compare with kingly joyes in earth.  
(57-60)

神は王ほど輝かしくはない。

神々が天でうける快樂は

地上の王者の喜びにはかなわないと思う。

とまで言っている。更に超人性は彼の敵側からも述べられているのは面白い。即ち彼を怪物視しているのである。

What God or Feend, or spirit of the earth,  
Or Monster turned to a manly shape,  
Or of what mould or mettel he be made,  
What star or state soever governe him,  
(II. vi. 15-8)

いかなる神、悪魔、地上の幽霊、

怪物が人間の形に変わったのか、

いかなる形や性質で彼は造られ、

いかなる星や条件が彼を支配するのか

Coseroe もまた彼を The strangest men that ever nature made (II, vii, 40)「自然がいままでに作ったうちで最も不思議な男」と述べている。又 Gorgon, prince of Hell (IV, i, 18)「ゴルゴン、冥界の王子」とも呼んでいる。

Tamburlaine 自身も超人性を意識して Having the power from the Emperiall heaven (IV, iv, 30)「壮厳な天からの力を持つから」と言っているし、

The God of war resignes his rounne to me,  
Meaning to make me Generall of the world,  
(V. i. 450-2)

戦の神もわしに地位をゆずり、

わしを世界の将軍にするつもりである。

と述べている。又部将に向って

Fight all couragiously and be you kings.  
I speake it, and my words are oracles. (III.  
iii. 101-2)

皆勇ましく戦え、そして汝ら王となれ。

わしがそう言うのだ。わしの言葉は神託だ。

とさえ言っている。

第2部において Techelles は、And mighty Tamburlaine, our earthly god, (I, iii, 138)「そして強大なタムバレイン、われわれの地上の神」と言っているし、又 Theridamus も Balsera 攻撃の場面で、Olympia に向い、

But Lady goe with us to Tamburlaine,  
And thou shalt see a man greater than  
Mahomet, (Part 2. III. iv. 45-6)

しかしあなたよ、われらと共にタムバレインのもとへ行きなさい。

そうすればあなたは、マホットよりも偉大な人を見るだろう。

と述べている。このように彼を神に近いものと見る例は数多く挙げられる。

Marlowe が Tamburlaine に与えた超人性は、更に中世の信仰——運命の神が車輪をまわし、人間がそれに乗って頂上に行って栄達し、車輪が下降して車輪と大地に挟まれて死ぬという——をも打破し、逆に運命の女神をも支配しようという不敵なものである。

I hold the Fates bound fast in yron chaines,  
And with my hand turne Fortunes wheel  
about,  
And sooner shall the Sun fall from his Spheare,  
Than Tamburlaine be slaine or overcome.  
(I. ii. 174-7)

わしは運命の女神達をしっかりと鉄の鎖に縛りつけ、

わし自身の手で運命の車をまわしている。

太陽がその軌道からはずれることがないように

タムバレインも殺されたり征服されたりしないのだ。

しかしこの超人性も第2部においては微妙に変化していることに注意したい。第一は彼自身が長男 Calyphas によって批判的に見られていることであり、第二は超人性が微妙に揺れているのが認められることである。第一については、Calyphas は父に対して次のように言う。

But while my brothers follow armes my lord,  
Let me accompany my gracious mother,  
(Pt. 2 I. iii. 65-6)

しかし私の兄弟が武器に従う間、父王よ、  
私は私のやさしい母のお伴をしましょう。

又兄弟に対し、

I know sir, what it is to kil a man,  
It works remorse of conscience in me,  
I take no pleasure to be murtherous,  
Nor care for blood when wine will quench  
my thirst. (Pt. 2. IV. i. 27-30)

お前、人を殺すことは何であるかを私は知っている。  
それは私の良心を責める作用をする。

私は人を殺すことを楽しみとはしないし、

又葡萄酒が私の渴きを癒すときに血は好まない。

これなはつきり戦争嫌悪の情をあらわしたものである。

第二については

When I am old and cannot manage armes,  
Be thou the scourge and terrour of the world.  
(Pt. 2. I. iii. 59-60)

わしが年老いて武器とれなくなったとき、

お前が世界の鞭・恐怖となれ。

と Tamburlaine らしからぬ弱音を吐いている。ここに彼の微妙な変化を見ることができ、これは第1部には見られなかった暗い陰影である。

## 5. その残虐性について

彼は神に近い超人性を持つが、戦において強力であることは一方人々に恐怖を与え、自分は残虐性をもつことになる。復讐・戦争・死・残虐は実に Tamburlaine の世界であると言われる<sup>9)</sup>。王 Bajazeth を檻から出してこれを踏台にしたり (VI. ii. iv)。爾後之を檻に入れて運

び、なぶりものにし、遂に王夫妻を自殺においやってしまう (V. i.)。又 Damascus の町の救助を願う処女を殺さしめてその死体を町の城壁に掲げさせたり (V. i.) Zenocrate の死を悲しんで町を焼き払ったり (Pt. 2, II. iii) 自ら勇気を示すために己が腕を切って息子にその傷口にさわらせたり (Pt. 2, III. ii.) 臆病な長男を刺殺したり (Pt. 2, IV. i.) Babylon 攻略に際して女・子供達を悉く溺死させたりする (Pt. 2, V. i.)。しかも Tamburlaine 自身はいかなる時も、死ぬ時においてもこの残虐な行爲を後悔したりはしない。なしろ残虐を好んでいると言える。戦争それ自体残酷なものであるから、征服に残虐を伴うのは止むを得ないのかも知れないが、舞台で生々しく演ぜられるこれらの場合を相像するとき、現代人のわれわれの感覚では冷静に受けとめかねるものがある。しかしエリザベス朝時代の観客は残虐な劇を結構楽しんでいただようである。

## 6. Tamburlaine と宗教

Marlowe と無神論については従来学者によって論争されており<sup>10)</sup>、この劇によって彼が無神論者であるか否かを判断することは容易でない。それ故私はここではこの劇にあらわれた宗教に関する部分に限って、その部分での意味を与えて見たい。

この劇で宗教に関する大きな場面は、第一に Sigismund の背信攻撃 (Pt. 2, II. i. ii) と第二に Tamburlaine がコーラン等を焼く場面 (Pt. 2, V. i.) とである。ハンガリー王でキリスト教徒の Sigismund は回教徒 Orcanes とそれぞれキリスト、マホメットの名で誓を立て、和議の盟約を結ぶ。しかるに Sigismund は二人の貴族により、異教徒に対する破約はキリストに背くことにはならぬからと勧められ、ついに盟約を破って Orcanes を攻撃する。Orcanes は破約を怒ってかく言う。

Thou Christ that art esteem'd omnipotent,  
If thou wilt proove thy selfe a perfect God,  
Worthy the worship of all faithfull hearts,  
Be now reveng'd upon this Traitors soule,  
And make the power I have left behind  
(Pt. 2. II. ii. 55-9)

全能であると尊ばれている汝キリストよ

もし汝が汝自身をあらゆる信仰あつき人々の崇敬を受ける価値がある完全な神であることを証明したいなら、いま、この謀叛人の魂に復讐せよ。

そして私が背後に残す力となれ。

キリスト教徒にあえて背信 行為をなさしめたのは、Marlowe が当時の教会に対して痛烈な諷刺を与えているのではあるまいか。Sigismund は敗れて死に、Oscanes は彼の死体を放置して鳥の餌食になれという。(Pt. 2, II, ii.)

次に Tamburlaine は Babylon 攻略に成功した後、Casane に命じてコーラン等回教の書物を火に焼かせる。

Now Casane, wher's the Trkish Alcaron,  
And all the heapes of superstitious bookes,  
Found in the Temples of Mahomet,  
Whom I have thought a God? they shal  
be burnt. (Pt. 2. V. i. 172-5)

さあ、カセインよ、私が神と思っていた  
マホメットの寺院で発見されたトルコのコーランと  
すべての迷信的な書物の山はどこにあるか。  
それらを焼いてしまえ。

コーラン等を superstitious という shocking な言葉で呼び、さぞかし当時の観客を驚かせたであろう。

In vaine I see men worship Mahomet,  
My sword hath sent millions of Turks to hell,  
There is a God full of revenging wrath,  
From whom the tunder and lightning breaks,  
Whose scourge I am, and him will I obey.  
(Pt. 2. v. i. 178-84)

入々がマホメットを崇拜するのは無駄だと判る。  
わしの剣は数百万のトルコ人を地獄に送ってしまった  
のだ。

復讐の怒りにみちた神があり  
この神から雷鳴と稲妻が起り  
わしはその神の鞭であり、その神にわしは従おう。

こう言って焚書の後、彼は Persia へ赴こうとするが、  
不快を訴え遂に死に至る。

それと明示はしていないが、観客は彼の死は焚書のた  
たりであると当然考えるであろう。先にキリスト教会を  
諷刺した Marlowe はここでは又 Mahomet への不信を  
も書いている。しかし Tamburlaine の死がその崇りで  
あると思わしめる点を考えれば、結局は Mahomet を認  
めているように思われる。これは先に背信した Sigi-  
smund が敗れたことについても同様なことが言える。  
しかしとにかく Marlowe が、キリスト教にせよ、回教

にせよ既成宗教にある程度の疑問を持っており、それを  
表明したことが、少くとも上述の場面から推論できる。

## 7. 結 び

以上 Tamburlaine の性格と思想を論じて来たが、結  
びとして劇としての“Tamburlaine the Great”にふれ  
て見たい。Marlowe は第1部を書き上げ、その輝かしい  
成功により、更に続篇を書かざるを得なくなった。それ  
は第2部の Prologue により明らかである。彼は第1部  
で Tamburlaine の征服をすでに書き尽してしまい、その  
続篇では新しい材料を集めて劇を構成し、Tamburlaine  
をいかに王者としての品位を保ちつつ死なせるかに苦心  
したと思われる。

第1部は高く憧れる心が調べ高い詩でつづられ、征服  
に征服を重ねる常勝の英雄が描かれている。Zenocrate  
を妃にするのも美しいものの獲得であり、第1部はいわ  
ば一つずつ獲得してゆく劇である。これに反して第2部  
は獲得したものを一つずつ失ってゆく劇である。三人の  
息子の中一人は自らこれを刺し殺し、Zenocrate に先立  
たれ、ついに自らも死に至る。しかし死に際して地図を  
とり寄せ、未征服の土地を指さしてその征服を子に託す  
る。すなわち彼の「高く憧れる心」は永遠に続くのであ  
って、彼の中心思想は永続性をもっている。しかし第2  
部では彼には微妙な変化があらわれている。そこに現わ  
れる Tamburlaine は長男 Calyphas によって批判され、  
Babylon 総督 Belsere 隊長により頭強に抵抗されるいさ  
ゝか暗い陰影をもつ英雄である。これは第1部になかっ  
たものであり、Marlowe の心の成長と劇作家としての  
一段の進歩を示すものであると私は考える。こうして第  
1部・第2部を併せ読むとき、これは英雄 Tamburlaine  
の性格と思想を見事に描き、劇として統一性もつづぐれ  
た作品である。特に格調高い無韻詩の調べと第2部の劇  
の構成の巧みさは従来よりももっと高く評価されるべき  
ではなからうか。

## 文 献

- 1) *The Complete Works of Christopher Marlowe*, ed. Tredson Bowers I, Cambridge University Press, 1973, p. 93 なお本論文の引用文はすべて此の書による。
- 2) *The Plays of Christopher Marlowe*, ed. Leo Kirschbaum. The World Publishing Company, 1962. p. 24.
- 3) *Encyclopaedia Britannica* 8, 1966. p. 400 B.

- 4) *Marlowe*, by J.B. Steane, Cambridge University Press, 1964. p. 81.

- 5) *ibid.* P. 22

その他の参考文献

*Christopher Marlowe*, by P. Henderson,

British Council and National Bank League, 1956.

*Themes and Conventions of Elizabethan Tragedy*, by M.C. Bradbrook, 1964

『マローウ研究』北川悌二著 研究社 昭和39年